

京都大学

霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院

ベトナム野外観察実習・保全活動視察

実施報告書

平成 16 年 8 月 7 日～17 日



「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

実施概要

本実習はベトナムに生息する種々の野生動物を観察する機会の提供と、現地で取り組みが行われている保全活動の視察を目的として行われた。また併せて現地で開催される国際霊長類学会に参加し、各国から集まった研究者の最新の成果に触れ、意見の交換を行うことも目的とした。

現地での活動・学習を円滑に進めるため、渡航前日に京都大学霊長類研究所に集合し、事前講義を行った。事前講義ではベトナムの社会体制、宗教・文化および歴史的背景の紹介にはじまり、気候による植生の変異や、経済活動及び戦争による自然破壊、植生回復への取り組みについて紹介した。また現地での注意事項や注目すべき点などについて確認した。

現地では日本留学経験を持つグエン・トウリュウ氏に協力を仰ぎ、マングローブ林をはじめとした森林を案内していただくと同時に、ベトナムの文化的背景とそれが自然環境に対する取り組みに与える影響について解説していただいた。実習中は毎日夕食後にミーティングを行い、その日に観察した内容やその印象、そこから考えたことについて一人ずつ発表し、全員で意見を交換した。これにより情報を共有するとともに、同じものを観察しても個々人の印象が大きく異なることが浮き彫りになり、翌日の観察がより豊かなものとなったと考えている。

ベトナムの国土は南北に長く、南部と北部では気候・植生・野生動物の分布が異なる。気候による自然環境の多様性を学ぶため、本実習では南部および北部の国立公園・自然保護区への訪問を行った。最初に訪問したカンザー国立公園はベトナム戦争時に散布された枯葉剤によりマングローブ林が完全に消滅し砂漠化した歴史を持つが、その後の多大な努力の結果、現在では7万ha以上のマングローブ林が回復している。北部で訪れたヴァンロン自然保護区は地域コミュニティの活動により保護区に指定された場所である。現在も地元住民の主導でエコツーリズムが行われ、地域コミュニティと共存した持続可能な保全活動が実現されており、地元住民の積極的な参画の重要性を体現した場所であると言える。同保護区では絶滅危惧種であるリーフモンキーを観察することができた。また国際霊長類学会では各国から集まった研究者の最先端の研究に触れ、意見を交換した。

今回の実習を通じて保全活動の最前線における成果と問題点を実地で学ぶ機会を提供することができたと考えている。各地の保全活動にはその国・地域の文化的・歴史的背景が非常に大きな影響を持ち、種々の思想のもとで活動が行われている。このことを実地で学んだ経験は、学生たちの今後の活動に資するものだと考えている。

本実習の実現に際して、松沢哲郎先生、湯本貴和先生をはじめ、PWS 担当教員の皆様には大変なご助力をいただきました。また実習の実施にあたってはPWS 事務の皆様、および実習に同道していただいた木下こづえ先生、早川卓志氏に多大なご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

(文責 大谷洋介)

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

報告者一覧

1. 大谷洋介（京都大学 霊長類研究所・生態保全分野・教務補佐）
2. 桜木敬子（京都大学 野生動物研究センター・博士後期課程）
3. 仲澤伸子（京都大学 野生動物研究センター・博士後期課程）
4. 横塚彩（京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科・アフリカ専攻・博士課程）
5. 水越楓（京都大学 野生動物研究センター・修士課程）

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

平成 26 年 10 月 7 日	
所属部局・職	霊長類研究所・生態保全分野・教務補佐
氏名	大谷洋介

1. 派遣国・場所 (○○国、○○地域)
ベトナム社会主義共和国 カンザー国立公園、ハノイ
2. 研究課題名 (○○の調査、および○○での実験)
ベトナム野外観察実習・保全活動視察、国際霊長類学会大会
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 8 月 7 日 ~ 平成 26 年 8 月 17 日 (11 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (○○大学○○研究所、○○博士/○○動物園、キュレーター、○○氏)
カンザー国立公園
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>ベトナムは枯葉剤による森林の消失と、その後の顕著な森林回復という保全上特異な歴史を持ち、実習の企画立案にあたっては森林保全のモデルケースとして現地の活動を見学するという目的を設定した。しかし実際の見学では、同国における保全活動の成果とともに問題点も浮き彫りになった。日本からの情報収集では分からなかった多くの事柄を実地で学ぶ機会を得ることになり、本実習は予想以上に実り多きものとなった。</p> <p>カンザー国立公園について、事前の情報収集ではマングローブの植林活動が活発な地域であり、回復したマングローブ林は多くの野生動物の生息地となっていると紹介されていた。この情報に誤りがあつたわけではないが、実際に現地を訪れてみると事前の印象とは大きく異なる背景の存在を知ることになった。同公園は7万 ha 以上の広大なマングローブ林を誇り、日本では見ることのできないマングローブの巨木も目にすることが出来た。</p>
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>広大なマングローブ林が広がる</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>樹高 10m を超えるマングローブも見られる</p> </div> </div>
<p>しかし一方で野生動物に対する保全上の注目度や配慮は非常に低い状態であった。観光客による野放図な餌やりが常態化していた他、カニクイザル・ブタオザル・イリエワニを利用したサーカスが行われ</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

るなど、昨今の保護活動や保全学における常識に逆行した状態であるように思えた。植生回復に対する熱意と努力量に比べて野生動物に対する意識が非常に低いことが、非常にアンバランスであるように感じられた。これに関しては全員が衝撃を受けたようで、全ての学生が報告書にこの件を記述している。

しかし話を聞くうちに、我々にとって非常に不自然に感じられるこのアンバランスさは立脚する考え方の違いによるもので、現地の方々の多くにとってこの姿勢はなんら矛盾しないものであることが分かってきた。現地で話を伺った国立公園管理官の方はマングローブ林を再生させた歴史を誇り、自然保護の重要性を強調していた。そしてその理由として、人間が生きていくために自然が必要不可欠であるから、と語っていた。個人的な印象ではあるが、これが彼らの大原則ではないかと感じた。これは別段特殊な考え方ではなく、例えば生物多様性の重要性を訴える際には人間にとっての遺伝子資源の有用性がしばしばアピールされる。これと同様に、現地の人にとって水産資源を供給するマングローブ林を保護することは非常に重要だと認識されている。一方野生動物は、宗教的な背景も関係して食用としてはそれほど利用されず、主には観光資源として利用されている。この観点から野生動物は生息していること、簡単に観察可能であること、観光客の目を引くことが重要とされているように感じた。このように考えると、現地の方々の森林に対する姿勢と野生動物に対する姿勢は一貫した考えの元に成り立っていることが理解できる。

保全活動の背景にはその土地の文化的・歴史的特徴があり、立脚する思想に相違が生じる場合がある。観点の違いが必ずしも異なる結果を導くわけではないが、場合によってはある観点において成功例とされるものが別の観点から見ると必ずしも成功とは言えないことを実感することになった。

とは言え、ベトナム人のなかにも我々と同じ観点に立脚する人もおり、国際霊長類学会で話をする機会を得たベトナム人学生の一人はベトナム国内における野生動物保全の現状を嘆き、どうにかして改善を試みたいと話していた。継続的に豊かな森林を維持するためには動物のかかわりが非常に重要な役割を果たすため、今後野生動物の保護管理に対する理解がベトナム国内に行きわたることを期待したいと思う。

6. その他 (特記事項など)

本実習の実現に際して、松沢哲郎先生、湯本貴和先生をはじめ、PWS 担当教員の皆様には大変なご助力をいただきました。また実習の実施にあたってはPWS 事務の皆様、および実習に同道していただいた木下こづえ先生、早川卓志氏に多大なご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

平成 26 年 10 月 7 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士後期課程学生
氏名	桜木 敬子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ベトナム社会主義共和国、南部・カンザー国立公園、北部・ヴァンロン自然保護区ほか
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ベトナム野生動物観察実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 8 月 7 日 ~ 平成 26 年 8 月 13 日 (7日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
カンザー国立公園、ヴァンロン自然保護区
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>今回の実習は、ベトナム国内に生息する種々の野生動物の観察および現地における特徴的な保全活動を視察することを目的として行われた。だが最も印象に残ったのは、ベトナム戦争とそれがもたらしたものについての、さまざまな事実や記憶・記録である。</p> <p>ガイドの男性曰く、ベトナム人は「自然が好き」だそうである。しかし、「自然が好き」と言うのには、幾通りもの意味合いがありうる。ベトナムは日本同様、伝統的に大乘仏教の影響の強い国である。一切衆生を区別しないのが本来であるから、西洋におけるような人間対自然といった二項対立は、もともと存在しなかったであろう。命はめぐる、生まれ変わる、私たちヒトを含めて自然は一体である、といった感覚であろうか。一方でそれはまた、日本同様、西洋においては近代の傲慢な人間中心主義への反省と言う形で生まれてきた、他の生物への倫理的な配慮というものが、この国では根付いていないことをも意味する。たとえば、「トカゲやヤモリや虫のいないところに人は住めないのだから、それらが生きていける環境を守らなければならない」という彼らの考え方は、ベトナム戦争で野ネズミのしっぽにガソリンを浸した布を巻き、火をつけて米軍の基地に放つという戦術を採用することと、矛盾はしない。</p> <p>8月8日・9日：カンザー国立公園</p> <p>私たちは今回、ベトナム南部のホー・チ・ミン市近郊にある、カンザー国立公園と言う場所を訪れた。ここはベトナム戦争中、米軍に抵抗したゲリラ(南ベトナム解放民族戦線)の唯一の基地があったという、広大なマングローブ林を擁している。勝手知ったるジャングルで有利に闘うゲリラに難儀した米軍が枯葉剤を撒き、マングローブ林を半ば壊滅させたのである(ちなみに、枯れ葉剤は直接人を殺傷しないので人道的だという理屈があったらしい)。だが、その後地道な植林が続けられ、今では元の4分の3ほどのマングローブが再生し、2000年にはユネスコの世界自然遺産に登録されている。そのマングローブ林の中にはまた、サル園が設けられており、餌付けされたカニクイザルなどがいる。参加者の一人は、かけていた眼鏡を三回もサルにとられた。そのくらい、サルにとってヒトとの距離が近い。見ていると多くの客がスナック菓子等をサルに与えているが、スタッフはまったく咎めない。また、当初オーストラリアから国内の動物園に導入されたというイリエワニの人工繁殖がなぜだか行われていたり、棒で脅しながらサルに火くぐりをさせロープでワニを引きずり回すような「サーカス」が行われていたりする。</p> <p>これらを見学した日の晩のミーティングにおいて、参加者の一人が、「動物に対するのと植物に対するのと、温度差が激しい」と意見を述べた。確かに、マングローブ林の復活は生態系全体にとって喜ばしいことだが、動物に対する理解や配慮は大変に浅いとしか言いようがない。憧れを誘うようなカリスマ的大型哺乳動物がいないことや、マングローブ林のあるところではエビ、カニ、貝など経済的利益をもたらす生物が多く獲れることも関係しているかもしれない。さらに、殊、このカンザーのマングローブ林に関して言えば、ベトナム戦争において米軍に屈しなかったという国家の誇りとも関係しているかもしれない。</p>

8月11日・12日：ヴァンロン自然保護区

一方、ハノイでの国際霊長類学会参加組と別れたあと訪れたヴァンロン自然保護区は、素直に素晴らしいと思えるところであった。ここは、地元住民の意志で観光業が始められ、彼らによってそれが続けられ、今に至っているのだそうである。絵画のように美しく穏やかな風景が広がる中、急峻な崖に棲む、肉眼ではゴマ粒のようにしか見えない希少なデラクール・ラングールの群れを、手漕ぎボートの上から見つめる。とはいえ、デラクール・ラングールはIUCNのレッドリストで最も絶滅の危険が大きい“critically endangered”にカテゴライズされており、現在も数が減り続けているとされる。また、地元の方にこの土地の自然や観光業について直接話を伺う機会はなかった。今、色々とお聞きしなかったことを少々後悔している。

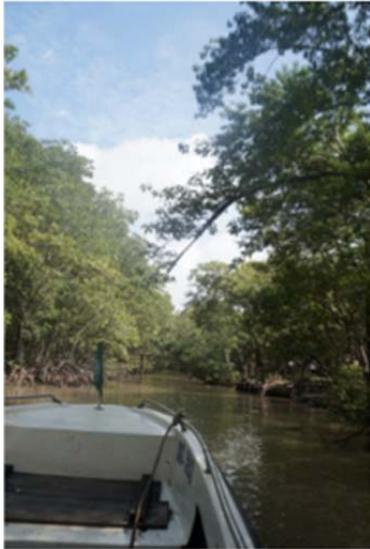


図1 カンザー国立公園のマングローブ林



図2 カンザー国立公園の「サルサーカス」



図3 ヴァンロン自然保護区の溪谷

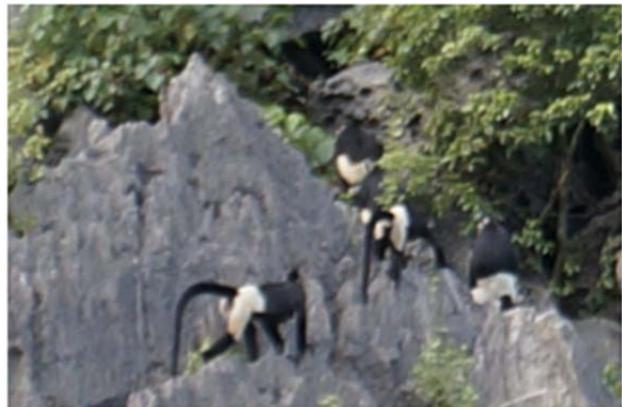


図4 ヴァンロン自然保護区のデラクール・ラングール

6. その他 (特記事項など)

オーガナイズしてくださった霊長類研究所の大谷洋介氏、ピースインツアーの堀米氏、現地ガイドのお二人およびドライバーの方々、実習を実現させてくださった PWS 関係者の皆様、共に楽しい時間を過ごさせていただいた参加者の皆様に、深く感謝致します。ありがとうございました。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

平成 26 年 10 月 7 日	
所属部局・職	野生動物研究センター 博士課程 1 年
氏名	仲澤 伸子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ベトナム
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ベトナム野外観察・保全活動視察
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 8 月 7 日 ~ 平成 26 年 8 月 13 日 (33 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
8 月 7 日から 13 日までベトナムのホーチミン、ハノイに渡航した。 ■カンザー国立公園 ホーチミンではカンザー国立公園を訪問した。カンザー国立公園は 1960 年のベトナム戦争の際に枯葉剤の影響でマングローブが大量に死滅したが、今では戦前の 3/4 にまで回復している。カンザー国立公園ではカニクイザル、ブタオザル、ベニガオザル、イリエワニとマングローブの林を観察した。観光客の大半はベトナム人のようであった。カニクイザルは観光客の菓子、眼鏡、タバコなど所持品を観光客から盗ったりもらったりしていた。また、カニクイザルに嫌がらせをして遊んでいる職員もいた。野生のカニクイザルを観察するのは初めてであったが、嵐山のニホンザルのようにまかれた餌を手でこするといった行動は見られなかった。驚いたのはカニクイザルと犬とイリエワニのサーカスである。イリエワニはコンクリートの上を引きずり出され、口を開けさせられた。観光客には石が配られ、彼らは列をなしてワニの口めがけて石を投げた。口に入った客には景品として菓子が配られたようだった。 また、large flying fox も観察した。木の上のほうで 40 羽ほどが休んでいた。休んでいる最中も体を煽ぐようにときどき翼を動かし、移動していた。


「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

また、動物園も訪れた。トラの獣舎には水が無く、何故かホワイトタイガーの獣舎のみ滝のように水が流れていた。また、オランウータンが広大な敷地に芝生という快適そうな場所で生活しているのに対し、チンパンジーは狭いコンクリート張りの獣舎内で生活しており、毛がところどころ剥げていた。ゾウは身動きもろくにとれない獣舎に閉じ込められていた。「DO NOT FEED」の看板も見受けられたものの、コビトカバは口を開けて観光客から菓子を投げられるのを待ち、プール内には菓子以外にもペットボトルなどのゴミが散乱していた。

ヴァンロン自然保護区ではボートに乗り、デラクールラングールを観察した。デラクールラングールは断崖絶壁を移動しており、双眼鏡なしでは観察も容易ではなかったが、当然観光客が干渉できるような距離にはおらず、ゆっくり観察することができた。現地人観光客は見受けられず、国際霊長類学会の関係者かもしれないが白人の観光客が多数見受けられた。現地の方が車に同乗し、鳥を観察できる地点やシカの角をとる家にも連れて行っていただいた。今回の渡航では、保全を行う上では動物を身近に感じる必要がある一方、観光客と動物の間には檻やデラクールラングールを見た時のような距離といったなにかしかの隔たりが無くてはならないと感じた。しかし一方で、双眼鏡が無くてはよく見えないラングールを観察するよりも、近くでサルを見る(触って餌をやる)、サーカスを見せることの方が現地の観光客に対する集客力はあるようだった。また、職員も観光客と変わらない認識を持っているように感じたため、まずは職員に対する研修が必要であると感じた。また、観光客に対して職員がピーナッツを渡しサルにあげるよう促す場面があったが、ピーナッツを販売する形式にすればなんでもあげていいという意識は薄まるかもしれない。現地の観光客の意識を変えることはすぐには無理だと思われるが、例えば「Do Not Feed」の看板をもっと増やす。子供にも分かるよう絵で注意事を説明する。ふだんどんなものを食べているのかと言った情報を掲示する事でおかしなものを与えるのをやめさせるといった工夫が必要であるのではないかと考えた。

6. その他 (特記事項など)

霊長類研究所の大谷洋介さま、木下こづえさま、早川卓志さま、野生動物研究センターの桜木敬子さま、水越楓さまに心よりお礼申し上げます。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

平成 26 年 10 月 7 日	
所属部局・職	アジア・アフリカ地域研究研究科・アフリカ専攻博士課程 1 回生
氏名	横塚彩

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ベトナム・ホーチミンおよびハノイ
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
カンザー国立公園エコツーリズムの視察および IPS への参加
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 8 月 7 日から平成 26 年 8 月 16 日
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学霊長類研究所、大谷洋介氏 (主催者)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>はじめに</p> <p>2014 年 8 月 7 日から 8 月 16 日まで、ベトナムのホーチミンにあるカンザー国立公園の訪問、及び国際霊長類学会大会へ参加した。一定の成功を取めていると評価されるカンザー国立公園のエコツーリズムに着目し、自然 (マングローブ林)、動物、人々がどのように共生しているか観察した。また国際霊長類学会大会では、世界中の霊長類研究者、保全活動家の研究内容を聞くことのできるよい機会となった。</p> <p>1. カンザー国立公園とエコツーリズム</p> <p>カンザーは、ホーチミン市内から南東へ約 60km の場所に位置する約 7 万 5000 ヘクタールの国立公園である。ベトナム戦争時には枯葉剤の影響を受け多くのマングローブ林が消滅した。1980 年代後半からマングローブ林再生活動をスタートさせ、現在では広範囲に及んでマングローブの再生に成功した。</p> <p>カンザー国立公園にはカニクイザルをはじめとしたマカク類が数種生息している。数種の中でもカニクイザルのグループサイズは大きく、人づけがかなり行われていた。「野生のサル」というよりも人づけの進んだ「野猿公園のサル」というイメージを強くもった。また来園者が猿に持参したお菓子など、食物を食べさせている場面を何度か目にした。公園関係者に餌やりの規則を聞いてみると、「生肉や餌を投げつける行為は禁止だが、持参した野菜などはあげることが可能」ということであった。サルは人から餌をもらうことに慣れており、その慣れによって、しばしば観光客から帽子や眼鏡など、食品でないものを盗む場面に何度か遭遇した。公園職員らは奪われた品々を取り戻すため、彼らをパチンコで攻撃したり、または餌を用いて奪われたものと物々交換する。サルたちにもこのルールは暗黙の了解な雰囲気があるので、観光客の身の回り品を盗む行為は中々減少しないであろう。</p> <p>かつてカンザー国立公園内の川にワニがいたが、現在では元々のワニはおらず、研究目的でオーストラリアから連れてきたクロコダイルを繁殖させている。ワニのタマゴを見つけては、人工飼育で孵卵させるプロセスを組んでいる。ワニ釣り、ワニのアゴの強さを体験できるものもあった。</p> <p>カンザー国立公園の歴史を知る上で、ベトナム戦争は切っても切り離せない関係にある。ホーチミンの中でもカンザー国立公園の周辺ではマングローブの密度が高く、ベトコンの拠点地域となっていた。そのような歴史を解説する模型や建物が、ベトナムの人々が戦時中も自然を有効的に活用していたことを伺えた。</p> <p>まとめ</p> <p>カンザー国立公園の来園者を見てみると、ほとんどがベトナム人ばかりで、海外旅行者の訪問は少ないと推定する。一般的な国立公園のあり方として、公園管理者は野生動物と観光客との「距離感」を非常に重要視すると思うが、カンザー国立公園のサルやワニを見てみると、いかに直接的なふれあいをすることによって重点を置かれているように思った。</p> <p>しかしカンザー国立公園で見られる全ての動物において観光客との直接的なインタラクションが起って</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

いるわけではない。サギ類が多く生息するバードサンクチュアリは自然も鳥たちも人間の手がほとんどはいていないし、絶滅危惧種のキイロコウモリも水上の上から静かに観察する程度であった。

アフリカなどの、多くの野生動物をもつ国立公園のあり方として、「野生動物とふれ合う」という意味は、生態環境や、その自然に棲む動物を見て楽しむことを指すように思うが、ベトナムの人々にとっての動物観は、直接的に触れて楽しむことが重要なのではないかと感じた。たとえ、マカク類と人間の間に感染症がないとしても、過剰なインタラクションは、後に野生動物と人のコンフリクトを生じかねない。公園管理におけるレギュレーションの重要性をカンザー国立公園の訪問で強く感じた。

2. 国際霊長類学会大会への参加

カンザー国立公園訪問後、ハノイに移動し、8/11 から 8/15 まで国際霊長類学会大会に参加させていただいた。まず初日に驚いたことは参加者が非常に多く、とても熱気があり、様々な研究分野の人々が混ざり合っただけでなく、学会大会の規模の大きさと勢いを感じたことである。また、学会中は地域や種を問わず、どのようなアプローチを私がやっていきたいと思う研究に近いのかを意識して、できるだけたくさんの方々のプレゼンテーションを聞くように心がけた。また外国人研究者のみならず、京都大学の研究者も多く参加されていたので、顔はよく知っているけれど、話したことがあまりなかった人と話せる機会が多くあり、自身の視野がとても大きく広がったように思う。まだ、調査地に入ったばかりで、どんなことが自分にできるのか分からないが、次の IPS では聴衆者ではなく、発表者の 1 人として参加したいと強く思った。

全体を通して

今回のベトナム訪問で見えてきたことは、「国立公園とはこうあるべきだ」というような観念を知らぬ間に私自身が持ってしまったのかもしれないということである。野生動物と人間の適度な距離感はもちろん不可欠ではあるが、そういった考え方も管理者や国や地域によってかなり異なるということを知った。比較的野生動物と近い距離感を持った文化の人々が今後どのような適正な距離の持ち方をするのか、関心がある。

また IPS に参加させていただき、1 人で研究について考えていたときよりも何倍も視野が広がったように感じ、今後の研究にも反映していける知識が多く身についたように思う。また多種多様な人びととコミュニケーションがとれたことが、IPS だけでなくその後の研究にも大いに重要になると考える。後半は体調を崩したりもしたが、前半の国立公園訪問も含めとても勉強になった。

IPS 風景



マングローブ林



カニクイザル



キイロコウモリ観察中



6. その他 (特記事項など)

IPS ツアーを企画してくださいました大谷さん、参加を承認してくださいました松沢先生、湯本先生に感謝いたします。ありがとうございました。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

平成 26 年 10 月 7 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	水越 楓

<p>1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)</p> <p>ベトナム カンザー国立公園、ヴァンロン自然保護区、東京丸の内</p>
<p>2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)</p> <p>ベトナム野生動物観察、キッズジャンボリー</p>
<p>3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)</p> <p>平成 26 年 8 月 6 日 ~ 平成 26 年 8 月 14 日 (9 日間)</p>
<p>4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)</p>
<p>5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)</p> <p>写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p>
<p>概要</p> <p>ホーチミン到着後、カンザーまで移動。翌日、カンザー国立公園内にある野猿公園を訪れた。そこには餌付けされたカニクイザル、ブタオザルがいた。また、ベトナム戦争時のゲリラ戦の様子を伝える施設が充実していた。3日目は同国立公園の別の施設を視察。野生のコウモリや鳥類、前日ほどではないものの餌付けされたカニクイザルなどを見ることができた。4日目はホーチミン市街へ。動植物園や戦争証跡博物館などを訪れた。その後ハノイに移動。5日目はIPS組とわかれ、ニンビンへ移動。夕刻よりヴァンロン自然保護区にて、ボートクルーズへ。多くの奇岩に囲まれた湿地帯で、その岩肌にラングールが生息していることが確認できた。また、サギなどの多くの鳥類も観察することが出来た。翌日は朝にボートクルーズを行い、再びラングールや鳥類を観察した。その後、鳥が営巣している林を訪れたり、村人の飼っているシカを見せていただいたりし、夜ハノイへ戻り、翌日帰国した。帰国翌日の14日に、東京丸の内で開催されていたキッズジャンボリーのブース手伝いとして参加した。</p> <p>○カンザー・野猿公苑</p> <p>運営は国(公務員や軍)が行っている施設だという。</p> <p>こういった施設なのか予備知識無く行ったため、入り口に入ってすぐに現れたカニクイザルの多さに驚き、彼らの人間に対する行動に驚いた。彼らは眼鏡や帽子といった人間のものを盗るという悪癖があった。そしてそれを取り戻すために、エサを与える。この悪循環は直そうと思いつても、なかなか改善することが難しいように思われた。また、客がエサを与えることも許しているようで、こういったことからどんどん人間との距離が近くなっていってしまう。これはもう一つの公園でもみられた行動であるが、係員が注意をしないことから容認されている行為なのだとわかった。</p> <p>ボートで移動した先にもサルをみる場所があるのかと思いきや、戦争のゲリラ戦の様子が再現されている場所へと案内された。予想外だったので驚いたが、森に隠れて戦ったゲリラの暮らしや戦い方等を詳しく知ることが出来た。また、マングローブの中を散策することが出来た。</p> <p>博物館の中には、植物や魚類の標本・戦争の武器や資料・土器等の発掘されたものであった。この辺りに生息する動物の剥製もあったが、これだけ多くのサルがいるにもかかわらず、それに関する説明がな</p>

いことに驚いた。戦争の資料が多く、枯葉剤により失われたマングローブをいかにしてここまで回復させたのかという説明は少ししかなかった。

○カンザー・二日目

カンザー国立公園内にある2つ目の観光施設へと訪れた。こちらはコウモリ等も観察できると伺っていた。まずモーターボートに乗る。道中には河で水上生活をしている人々が多く見られた。15分ほどで、コウモリを見ることが出来るという bat sanctuary に到着。そこから手漕ぎの小さな船に乗り、コウモリがいるところに行くという。洞窟か何かに行くのかと思いきや、少し開けた場所から木の上を見ると沢山のコウモリがとまっていた。木の頂点まで距離があるものの大きく見え、コウモリがかなりの大きさであることがわかった。見ることができたのは、果物を主に食べるというオオコウモリで、まるで日向ぼっこをしているかのように微睡んでいた。彼らは餌付け等をしている訳ではなく、このポイントに訪れることがわかっており、邪魔をしないように静かに観察することで維持しているという。また、コウモリ食は中国人にとっては一般的であり、密猟をする人もいるという。そのため数を減らしているらしい。

○ホーチミン市街

ホーチミン市街観光では、市場や教会、郵便局、動物園、戦争証跡博物館へと訪れた。教会や郵便局はいかにも西洋といった感じで、郵便局の内部はまるでパリの駅や美術館の建物に似ていた。動物園は日曜日ということもあってか、家族連れ等多くの人。入園料は約300円であった。動物の展示は種によってバラバラで、コンクリートでできたいわゆる昔ながらの展示方法のチンパンジーの隣に、地面は土で遊具もある広いブースを与えられたオランウータンもいる。思っていたより、動物福祉が実施されているようには感じた。園内も市街地とは思えないほど広く駆け足でまわっても一時間ではすべてを見ることは出来なかった。戦争証跡博物館は時間がなく、少ししか見ることが出来なかった。戦時中の写真や、枯れ葉剤による奇形児の写真等多くの写真が展示されていた。ベトナム語、英語に加えて日本語での説明があるブースがあり、何故日本語が選ばれたのか気になった。

○ニンビン・ヴァンロン自然保護区

竹や木で出来た簡素な手漕ぎボートが岸に沢山並べられている。定員は漕ぎ手を含めて3人。うまく乗らなければひっくり返ってしまいそうな船だ。保護区内にはカニを捕るための網ワナが仕掛けてあり、観光用の船より小さな一人乗りの船で青年が颯爽と水面を進んでいた。

強い日差しの中進むと、船を漕ぐ音と鳥の声しか聞こえない。広がる美しい景色に気を取られながら進むと、日陰に船をとめた。どうしたのかと聞くと、サルとの約束の時間にまだ早いから休憩だという。休んでいるとふいに漕ぎ手のおじいさんが声を上げた。サルが来たのだ。必死に眼を凝らして探すも中々見つからない。場所を教えてもらいやっと見つけるも、遠すぎて米粒よりも小さかった。黒い体で白いパンツを履いているかのような見た目で、種類を聞くも手と尾が長いサル、という説明のみであった。あとで調べてみると、デラクールラングールという種であった。岩肌に張り付いているサルはだいたい80頭ほど生息しているという。この日一番多く見られた際には11頭ほどいたと思われる。生まれ

たてで体がまだ黒くなく茶色いアカンボウも観察することが出来た。計三時間超の長いボートクルーズとなった。

翌日は早朝からのボートクルーズを行った。昨日とは異なり、洞窟コースであった。早速、昨日も観察されたラングールを発見した。その後ゆっくりと進み、合計3つの洞窟をくぐって、計二時間ほどのクルーズとなった。途中、植物や食べ物話になり、戦争中の話も伺った。ベトナムでは、水中や地中の食べ物を陰、植物など地上のものを陽と考え、食事をとるときに考えて出しているという。また、戦争中アメリカ軍に食事を提供する際、自身らの植物の知識を生かして、腹下しの植物を混ぜたりしていたという。船を漕いでいるおじいさんに、漕ぎ手に若い方が見当たらないという話を聞いてみた。すると、確かに若い人はあまりいないという。そして、彼の本業は米をやることで、客がいるときは船を漕ぎに来るバイトのようなものであるとのことだった。彼の娘たちは私たちが宿泊していたホテルで働いていたり、この伝統的な船を作っていたりと、この街には住んでいるそう。若い人がいないと、継続的にこの観光を行えるのか、と不安に思ってしまうが、副業的に行うことで利益に固執せずゆったりと出来ているのではないかとも思えた。

午後に、昨日船を漕いでくれていたおじいさんの案内で鳥の巣が多くある所に連れて行ってもらった。この時間はみんな仕事に就いていて、仕事が休みの鳥が今ここにいる、おじいさんが鳥のお家に訪問してくる、とかかわいらしい表現に頬を緩めながら子育てシーズンの鳥(サギ類と思われる)を観察した。次におじいさんの知り合いがシカを飼っているというので、見せてもらうことになった。シカは10頭近くおり、角をとるために育てていた。角は半年で切ることが出来るようになり、片方で3万円の値がつくという。また、その際に出た血を酒に入れて飲むそうだ。

○ベトナム全体について

戦後約40年のベトナムは、平均年齢が30歳だそうで、今の日本とは大違いだ。まだまだこれから発展していく、といった感じであったがバイクと排気ガスを考えていかないと喘息の子供が増えるのではないだろうか。また、老いも若いも朝も夜も、屋台の椅子に座って食事をしながら世間話に花を咲かせているのが印象的であった。

ハノイからニンビンまでの道中、外を眺めていると所々に教会の塔が建っていた。家も扉や窓、柱等が西洋風で一瞬ここがベトナムなのかわからなくなる程であった(西洋風は前面だけで、側面はコンクリートむき出しだったりする)。

何かを学ぶために海外に行くという経験は初めてであったため、夜におこなったミーティングはとても充実したものであった。ヴァンロンの地域は私たちが参加した以外の場所でもボートクルーズを行っており、日本人のツアー観光などではそちらが主流であるとインターネットに書いてあった。しかし、そちらは観光地化が進み、物売りやチップの過剰請求などがあり、気分よく過ごせないといった書き込みが多く見られた。利益追求型に走り客の気持ちを無視した観光スタイルにしているのは長続きしない。それは日本の観光地にもみられる問題である。

ベトナムに旅行に来たとしても自分だけでは行けないような場所に行くことが出来、また自分では思いつかないような先輩方の意見を聞くことから考えを深めることができた。

○キッズジャンボリー

帰国翌日、東京丸の内で開催されていたキッズジャンボリーのブース手伝いとして参加した。PWS と JMC の共同出展となっていた。三日間中一日のみの参加となった。奥まった位置にブースがあったため、来てくれた子供たちや親御さんは興味を持って色々質問して下さったため、楽しんで対応することができた。しかし、自分の専門外である霊長類学について複雑なことを子供たちに上手く伝えることは難しく、まだまだ経験を積んでいかねばならないと感じた。来年も出展するのであれば、ぜひ参加したい。



写真 1 野猿公苑のカニクイザル



写真 2 オオコウモリ



写真 3 マングローブ林

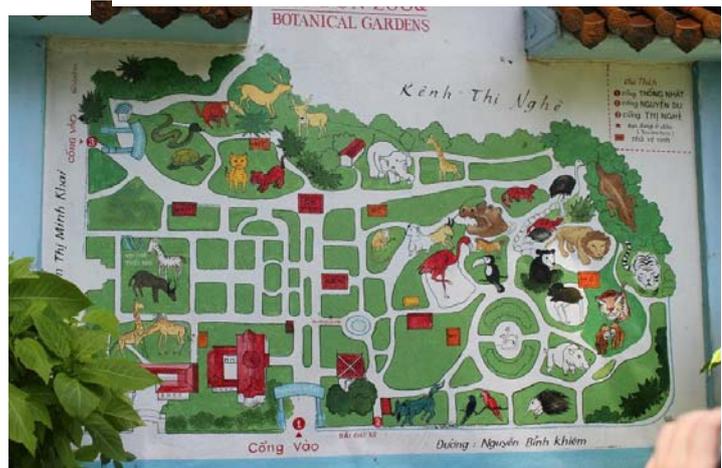


写真 4 動物園マップ



写真 5 ヴァンロン自然保護写真 6 鹿の角

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

6. その他（特記事項など）

今回のツアーを企画して下さり引率して下さった大谷洋介さん、同行して下さった先輩方に感謝申し上げます。